

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

感謝の気持ち

北辰中学校三年

山本 やまもと

ひかる

午前六時十五分。母の野菜を切る音が、私の部屋まで届いてきます。私は毎朝この音で目を覚ますのです。まだ目もまともに開けられず、ぼんやりとしたまま階段を下りていくと、

「おはよう。よく眠れた？」

という母の優しい声と笑顔で、今日も私の一日が始まります。

私の母は、いつもここにこゝ笑っていて、でもその分すごく涙もろくて。

誰よりも心配性で、いつも最後まで不安そうな顔でいます。でも誰よりも私のことを応援してくれています。そんな優しい母を、私はとても誇りに思っています。勉強も部活も全然自分の思い通りにできず、もう嫌だと弱音を吐いたときも、一番近くにいてくれたのは母でした。母は、私の話をずっと黙ってただひたすら聞いてくれました。それだけでも心が軽くなった気がしました。そして母は、私の背中を優しくさすって、

「ひかるならできるよ。大丈夫だよ。お母さん、応援しているからね。」
と言ってくれました。私と同じくらい、またはそれ以上に辛そうな顔をして、励ましてくれるのです。その時の母の声や表情を忘れることはできません。辛かったはずなのにいつの間にか、こんなに私のことを想ってくれる人が、こんなにも側にいたのだと感じて、なんだかとても温かい気持ちに包まれました。この、優しいなどという言葉では収まりきらない母からの深い愛情に、今まで何度も何度も支えられてきました。母のおかげで頑張ってきたこと、諦めずにやり通してきたことは数え切れません。母のおかげで今の私があるのだと、切実に思います。

私の将来の大きな目標は、母に親孝行することです。このことを母に言うと、決まってその気持ちだけで十分だ、と言うのです。ですが、私は一緒に悩んで頑張つて、ずっと支えてきてくれた母に、精一杯の感謝を伝えたいです。今まで照れくさくて言えなかったことも、全部伝えたいです。私が一人前の大人になったら、そのときは家族全員でいろんなところに出かけて、みんなでたくさん話して、母の笑っている姿を見て私も笑いたいです。そんなことを想像するだけで、とても幸せな気分

なれます。実現するために、今からしつかり頑張ろうと思えてきます。何も言わなくても、何もしなくても、母がそこにいるだけで私は前向きな気持ちになることができます。普段はあまり意識していなくても、ふとしたときに私の母の存在の大きさを感ずるので。

きつと私はこれから、母にたくさん迷惑をかけてしまうことでしょう。いつばい困らせて、悩ませてしまうことでしょう。でもきつと母は、そのことを決して迷惑とは言わずに、ひとつひとつ、私と一緒に乗り越えてくれることでしょう。そして乗り越えられたときには、きつと優しい笑顔で私を見つめてくれます。そんな母は私にとって、唯一無二で、本当にかげがえのない存在です。もし生まれ変わっても、また母のもとに生まれたいと心から思います。もし私がそうならなくても、他の子が母の子どもになれたのなら、それは他の皆が羨むくらいに、幸せなことだと思えます。そのくらい母は、私にとって誇れる存在なのです。

私がいちばん共に過ごした時間が長いのは、先生でも友達でもなく、家族です。それは私に限ったことではなく、みんなそうなのではないかと思えます。そんな長い時間を共にしてきた家族の間には、深い絆があることでしょう。その絆を支えてくれているのが、母親という存在なのです。家に帰ると、温かい夕食が用意されていて、いつの間にかお風呂が沸いています。昨日洗濯に出したはずの制服が、きれいになってたまたまれています。これらは当たり前なことなのでしょう。いいえ、決してそんなことはありません。私達が今こうして生活できているのも、母のおかげなのです。お腹の中にいた小さな小さな私達が、今こうして文字を書いています。当たり前のことではないのです。だからこそ、私はたくさん感謝を伝えたいのです。伝えなければならぬのです。大人になってからも、もつとたくさんさんの、「ありがとう」を言いたいです。どんなときも、誰よりも私の側に来てくれた、私の母に。